

ハイデルベルク信仰問答より

問 96 第二の戒めで、神は何を要求しているのですか。

答え それは、私たちが御言葉において命じられた以外の仕方では、どのような仕方によっても、神を想像したり、崇めたりしてはいけない、ということであります。

第二戒 あなたは刻んだ像を作ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、地の下の水の中にあるすべてのものの、いかなる形をもつくってはならない。あなたはそれらにひれ伏し、それらに仕えてはならない。それは、主なるあなたがたの神である私が、ねたみ深い神であるからである。私を憎む者については、父の罪を子に報いて三、四代まで罰するが、私を愛し、私の戒めを守る者については、千代までも不動の愛を示すであろう。

十戒の第二戒では、神を形にすることが禁じられています。第一戒では「あなたは、私の前で、他の神々を拝んではならない」と、他の神々の偶像を拝むことが問題にされていました。それに対し今回は、鑄造であれ絵画であれ神を形にしてはいけないと言われているのです。このところに人間は常に大きな誘惑を受けていると言えます。目に見えない存在を拝し祈るよりも、目に見える対象に向かって行動する方が分かりやすいからです。聖書信仰者にとって「何かを偶像化しない」ということは、実は細心の注意を払う必要があります。

イスラエルの民が荒野で金の子牛の像を作ったことについて、朝岡氏は次のように指摘しておられます。「イスラエルの民は神の怒りに触れて裁かれるのですが、それは彼らが主なる神を否定して、他の神として金の子牛を拝んだからというよりも、むしろこの金の子牛像をもって、自分たちをエジプトから連れ上った神と表現したからでしょう」(p. 282)。本来人の手によって作られるはずのない神が形にされてしまったことが問題であったということです。創造主なる神を人の手の中に収めるという冒瀆がここにあるのです。

日本人の雑多な宗教観は、「鯛の頭も信心から」と言われるように、信心さえあれば掃いて捨てるようなものでも崇拜の対象となり得るというものです。如何に手の込んだ仏像であっても、それを崇拜することを神は受け入れることができません。

キリスト者が陥りやすい過ちとしては、「聖書」という物体そのものをお守りにしたり、十字架の形をしたネックレスに向かって祈ったりすることが挙げられます。その意味では、ルネサンス時代に描かれた素晴らしい壁画にも問題は潜んでいるのかもしれませんが。一例として、システイーナ礼拝堂にあるミケランジェロの「アダムの創造」では、アダムの指に神の指が触れようとしているイメージが描かれています。歴史的な名画ではありますが、神が姿形として描かれているところには、第二戒への抵触がないと言えるでしょうか。神を「老人」のように描くことにより、無限なる神、老いることのない方がそのイメージの中に押し込められていると言えるかもしれません。私たちは神を「見えない方」「霊的存在」として礼拝する必要があり、如何なるものも神を模写するものとしてはならないのです。

最後に、聖書が繰り返し「ことば」として神の栄光を表現している点にふれておきたいと思います。

- ・ ウジヤ王が死んだ年、私は、高く上げられた玉座に主が座っておられるのを見た。その衣の裾は聖所を満たしていた。上の方にはセラフィムが控えていて、それぞれ六つの翼を持ち、二つの翼で顔を覆い、二つの翼で足を覆い、二つの翼で飛んでいた。そして互いに呼び交わして言った。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主。その栄光は全地に満ちる。」（イザヤ 6:1-3）
- ・ 生き物の頭上の大空高くに、ラピスラズリの玉座のようなものが見えた。その玉座のようなものの上にひととき高く、人の姿のようなものがあった。私は、腰のように見えるものの上に、琥珀金のきらめきのようなものを、その周りに火のようなものを見た。腰のように見えるものの下に、火のようなものを見た。その周りには輝きがあった。周りの輝きは、雨の日に雲の中に現れる虹の姿のようであった。これは主の栄光のような姿であった。私はこれを見てひれ伏した。私は、語る者の声を聞いた。（エゼキエル 1:26-28）
- ・ 私は夜の幻を見ていた。見よ、人の子のような者が天の雲に乗って来て、日の老いたる者のところに着き、その前に導かれた。この方に支配権、栄誉、王権が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちすべてはこの方に仕える。その支配は永遠の支配で、過ぎ去ることがなくその統治は滅びることがない。（ダニエル 7:13-14）
- ・ 私は、たちまち霊に満たされた。すると、天に玉座があり、そこに座っている方がおられた。その座っている方は、碧玉や赤めのうのように見え、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた。また、玉座の周りに二十四の座があり、それらの座には白い衣を身にまとい、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老が座っていた。玉座からは、稲妻、轟音、雷鳴が起こった。また、玉座の前には、七つの松明が燃えていた。これは神の七つの霊である。また、玉座の前には、水晶に似たガラスの海のようなものがあった。（黙示録 4:2-6）

これらの描写を絵に描くことはある程度可能でありながら、それが推奨されているかどうかは分かりません。人は形にすると崇拜の対象としやすいことを神様はよくご存知です。ことばによって福音は宣べ伝えられ、ことばによって神の属性は説明されています。聖書読者は、書かれていることばをそのまま受け取ればよいのでしょう。